

二百年影を落とした一夜の愛 (伊勢神宮神罰問題)

元 関西外国語大学 教授
金谷信之

これから書こうとするものは、単なる歴史上の物語ではない。情報、中でも、風説的個人情報と云われる種類の情報の姿を、王朝時代の歴史の中で拾ったものである。そして、この種の情報の持つ破壊力の恐しさを描き出し、にもかかわらず、我々はそれに対応する手段を殆ど持っていないことを見ていったものである。

【在原業平と恬子内親王】

在原業平の一代記の歌物語である伊勢物語は、「狩の使」と題した第69段に、業平と伊勢 斎宮 恬子内親王との一夜の情交の話を描いている。

この歌物語を「伊勢物語」と呼ぶのは、この話が、物語成立の当初の頃は、巻頭の第1段にあったためであるとも云い、そうでなくても、幾多の恋物語が散りばめられたこの歌物語の中にあっても、この一夜の愛こそが、愛の極致の姿であると考えられたために、特にそう名付けられたのだとも云う。

伊勢斎宮は未婚の皇女たちの中から選ばれて、伊勢神宮に巫女として奉仕する女性である。神に仕える女、すなわち神の妻であり、神聖にして冒すべからざる神女である。業平は狩の使として伊勢の国に下る。狩の使とは宮中の宴会用の野鳥を

捕らえさせるために諸国に派遣する勅使のことである。業平は斎宮の館に宿泊する。(図1参照)

業平は斎宮恬子に二人だけでお逢いしたいと、そっと云う。彼女は親友これたか惟喬親王の同母妹である。従って兄から妹へ、業平がそちらへ行くようだから、宜しく便宜をはかってやってくれ、との書状は予め届けられていた。それかあらぬか、業平は酒宴の後一人部屋に帰り、寝付かれないままに、西に傾く月を見るときもなく眺めていると、恬子が業平の居る部屋に、そっと音も立てず影のようにやって来る。短い情交の後、あかときに自らの部屋に帰った恬子は、一つの歌をしたためて業平のところへ侍女に届けさせる。それが、伊勢物語の歌の中でも、五指のうちに入る屈指の名歌。

「君や乗し我れや行きけむ思ほえず 夢かうつつか 寝てか覚めてか」(貴方がお出でになったのでしょうか。それとも私が伺ったのでしょうか。一体あれは夢だったのでしょうか、うつつだったのでしょうか。)

それは愛の行いの朦朧とした夢幻の境のみならず、淡い月光の射し入る「ほのかな」世界を描き出すものでもある。

この時、恬子と業平の間には、単なる男女の間ではなく、同じように悲しい運命の下にいる者同士の心の通い合いがあった。

すなわち、業平は桓武天皇の第一皇子なる平城天皇の第一皇子阿保親王の子。しかし、業子の乱によって平城天皇は皇位から遠ざけられ、その子孫もそれぞれに不遇の道を歩んでいた。一方、惟喬親王は文徳天皇の第一皇子。しかし、皇位は摂政藤原良房の娘の明子あきらけいこ所生の惟仁親王(清和天皇)に奪われ、怏々として心楽しまぬ日々を送る身であった。同じような境遇の下で、惟喬親王と業平とは互いに心を通じ合わせた親友であった。恬子はその惟喬と母を同じくする妹。業平と恬子との一夜の愛の行為には、そうした悲運の共感があった。(図2参照)



図1 伊勢物語絵巻：狩の使
(三重県立斎宮歴史博物館蔵)

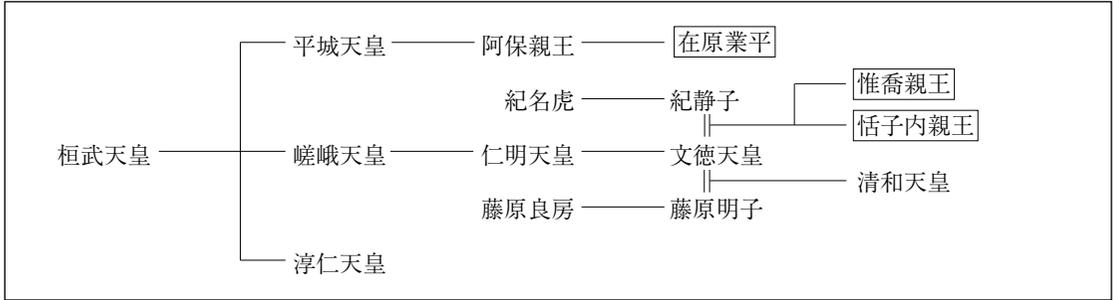


図2 業平と恬子の関係系図

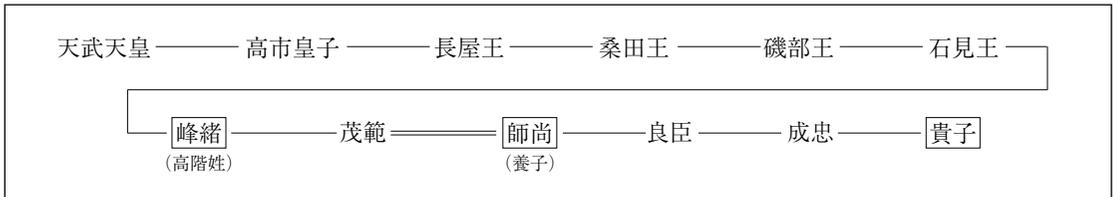


図3 高階氏系図

何年連れ添っても子をなさぬ夫婦も多いのに、何と云う皮肉。この一夜の情交によって恬子内親王は懐妊する。やがて月満ちて一人の男子が産まれる。本来は生まれて来ることの許されぬ子供である。時の伊勢権守兼神祇伯の高階峰緒は、この処置に苦慮した。彼は師尚と名付けることになったその子を引き取って、我が子茂範の養子とした。

しかし、この時から、高階氏は伊勢神宮に憚りある家系、すなわち、伊勢神宮に参詣することを許されない家系と云うことになったのである。

ちなみに、高階氏は天武天皇の第一皇子高市皇子の後裔氏族で、この峰緒は長屋王の子桑田王の後である。(図3参照)

【皇后定子と敦康親王】

業平や恬子内親王の物語は、清和天皇の貞観年中、860年頃のこと。それから既に150年近くの月日が流れて、1011年、三条天皇が即位の時に、突然に、この二人の愛の物語が政局の中に浮き上がる。

寛平2年、花山天皇の突然の出家讓位により、皇太子であった一条天皇が僅か7才で即位する。一条天皇が11才で元服した時、関白藤原道隆は我が娘で15才の定子を天皇の中宮に入れる。枕草子を書いた清少納言は、この中宮定子の女房の中の一人であった。

しかし、定子が21才になった時、父道隆は疫病によって死亡する。そのみならず、その翌年には兄弟の伊周と隆家が、仲違いした花山法皇に矢を射掛けるという不祥事が起こり、兄の伊周は太宰権帥に、弟の隆家は出雲権守に左遷される。二人は1年後には罪を赦るされて召還されるが、定子もまた出家を余儀なくされ尼削ぎになる。尼削ぎとは尼となって垂れ髪のを先を頸のあたりで切り揃えた髪のことである。

しかし、一条天皇は尼となっても定子を手放さず、長保元年(999年)24才の定子は皇子敦康親王を出産する。その年、関白藤原道長は12才の娘彰子を一条天皇の下に入れる。源氏物語を著作中で、つとに名の知られていた紫式部は、この時、道長の懇請によって、この彰子に仕えることになる。

翌年、定子は再び妊娠するが、あっけなくも産褥で死去してしまう。定子の忘れ形見敦康親王は彰子が引き取って養育する。彰子はやがて二人の皇子(後一条、後朱雀)を出産するが、彼女は敦康を我が子以上に可愛がり慈しんだ。

この一条天皇は、寛弘8年(1011)32才で死去し、かねて皇太子であった三条天皇が即位する。この時、新たに三条天皇の皇太子を選ぶに当たって問題が噴出する。結果として、13才になる敦康親王を差し置いて、彰子所生の、まだ4才の敦成親王(後一条)が皇太子に選ばれる。

